



目 次

学院長から

生命理工学院長 梶原 将 教授

安部 聡 助教

伊藤 由馬 助教

新任の先生の挨拶

五十嵐 龍治 教授

黒田 公美 教授

安井 隆雄 教授

瓜生 耕一郎 准教授

藤 泰子 准教授

阿尻 大雅 助教

大坂 夏木 助教

木幡 愛 助教

近藤 洋平 助教

田中 裕之 助教

野々山 翔太 助教

藤岡 礼任 助教

PROKOFEVA Kseniia 助教

松永 達弥 助教

六車 共平 助教

村上 匠 助教

活動・行事

オープンキャンパス 2023

第 12 回生命理工国際シンポジウム

ASEAN-Japan International Research

Symposium for Life Science and Technology

受賞

2023 年度 HFSP グラント

2023 年度「東工大挑戦的研究賞」

2023 年度島津奨励賞

2023 年版クラリベイト社の高被引用論文著者に選出

HPCI 利用研究課題優秀成果賞

令和 5 年度竹田国際貢献賞

令和 5 年度竹田若手研究者賞

手島精一記念研究賞

異動の先生の挨拶

中戸川 仁 教授

増田 真二 教授

門之園 哲哉 准教授

正木 慶昭 准教授

学生の活躍

大隅ジャーナル賞

コラファス賞

東工大学生リーダーシップ賞

BIOMOD2023 プロジェクトアワード銅賞

「鳥人間コンテスト 2023」4 位

東工大大学院生らのチームがヨットの「第 11 回大学対抗 & U25 マッチ」で 3 位入賞

定年退職・ご栄転の先生の挨拶

藤井 正明 教授

三原 久和 教授

山本 直之 教授

赤間 啓之 准教授

野々村 恵子 准教授

留学生より

編集後記

学院長から

生命理工学院長
梶原 将 教授



皆様、こんにちは。

さて、東京工業大学は今年10月1日に東京医科歯科大学と統合し、東京科学大学となりました。この新しい大学では、理学や工学に加え、医学、歯学、看護学などを有する、まさに理工系総合大学となりました。生命理工学院はこれからも様々な生命理工学の教育と研究を進めていく共に、医歯理工融合による最先端の教育研究も展開していきます。その最初の取組みとして2025年4月からは生命理工学院を中心とした複合系の大学院課程カリキュラム「人間医療科学技術コース」を開始します。このコースでは旧・東工大教員と旧・東京医科歯科大教員と一緒に大学院教育を実施していきます。

今後も益々発展する東京科学大学と生命理工学院の応援を宜しくお願い致します。

新任の先生の挨拶

着任のご挨拶

五十嵐 龍治 教授



2024年4月より、生命理工学院の教授に就任した五十嵐龍治です。また、国立研究開発法人量子生命科学研究開発機構(QST)の量子生命科学研究所でチームリーダーも務めています。この度、梶原将学院長および馬場嘉信所長、両組織のご支援により、この貴重な機会を得られたことを心より感謝しております。学生時代、京都大学の白川昌宏先生の影響を受け、細胞内での現象を物理的・化学的にシンプルに理解することに興味を持ちました。NMRなどの磁気共鳴法を用いると、多くの物理的・化学的パラメータを定量的に取得できますが、アンサンブル平均の必要性から個々の細胞の特異な情報は失われがちです。これに対し、蛍光イメージングを含む一細胞解析手法では、個々の細胞の詳細を把握できますが、物理的・化学的パラメータの定量化が難しいという問題があります。これらの課題を解決するために、15年以上にわたり量子センシング技術を駆使したナノサイズのセンサープローブの開発に注力してきました。この「ナノ量子センサー」は、細胞から小動物の脳まで様々な生体環境で利用され、細胞内の微小環境や生体分子の微量分析など、多岐にわたるパラ

メータを測定する有用なツールとして成長しています。

QST においては、この技術を医療や産業へ応用し、社会貢献を目指す開発研究を進めています。理想の未来を具体化し、そのビジョンに向けた研究を行うことは、国立研究所としての重要な使命の一つです。生命理工学院では、大学の最大の使命である「知識の進歩」に貢献するため、学生や若手研究者と共に、ナノレベルでの生命の探求を進めていきたいと考えています。

黒田 公美 教授



2023 年 4 月より生命理工学院教授として着任いたしました黒田公美と申します。大阪大学医学部を卒業後、前職の理化学研究所にはポスドク時代を含め約 20 年在籍し、親子関係をつくる神経機構の研究をしておりました。着任時には引越など、ご迷惑をおかけしたこともあったかと存じます。その節は様々な方に親切にいただき、心より感謝申し上げます。

東京工業大学には多岐にわたる工学系分野の最先端の研究室がそろっており、私も着任後すぐに情報理工学院の吉村奈津江教授との共同研究もさせていただくことができました。このすばらしい研究・教育環境の一構成員として、微力ながら何がしかの貢献ができますよう

努力して参ります所存です。何かできることがございましたら遠慮なくお声がけ下さい。今後ともお世話になりますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

安井 隆雄 教授



2023 年 5 月より、生命理工学院の教授に着任致しました、安井隆雄と申します。研究室をスタートさせるにあたり、多くの先生方、生命事務の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

私は、これまでに工学的な技術に立脚してナノデバイスを作製し、理学的な観点からナノデバイスと生命分子との相互作用を解析し、生命分子の新奇な解析方法を開発してきました。生命理工学院は、生命・理学・工学の多岐にわたる分野の融合が高度に達成されていることも伺い、この環境にて研究活動を実践する有難い機会を頂戴したと感じております。また、この環境を大いに生かし、学院内の先生方との密な連携を通じて、新たな研究を展開していきたいとも考えております。

最後になりますが、生命理工学院のさらなる発展に貢献できるよう、微力ながら努力して参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

瓜生 耕一郎 准教授

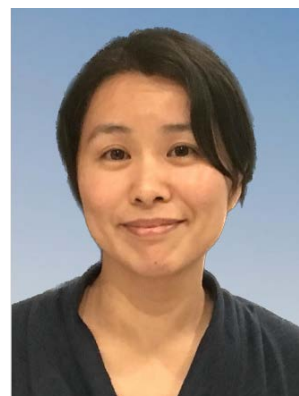


2023年7月1日に生命理工学院に准教授として着任しました瓜生耕一郎と申します。私は九州大学大学院で学位取得後、約2年半ドイツ・ドレスデンに留学し、帰国してからは理化学研究所や金沢大学で研究および教育に取り組んできました。

私の専門は数理生物学で、数式やシミュレーションを使い生命現象の研究をおこなっています。これまで発生時計や概日時計といった生物時計の研究に主に取り組んできました。発生時計の研究では、細胞の動きや組織の伸長といった発生特有の現象が、細胞内の遺伝子発現リズムに及ぼす影響に着目して解析を行ってきました。概日時計の研究では、概日時計の重要な3つの性質 (1)自律振動性, (2)温度補償性, (3)光や温度サイクルに対する同調性のそれぞれについて研究を行ってきました。生命理工学院ではこれまでの研究に加え、新しいテーマにも挑戦したいと考えております。共同研究の機会がありましたらどうぞよろしくお願い申し上げます。

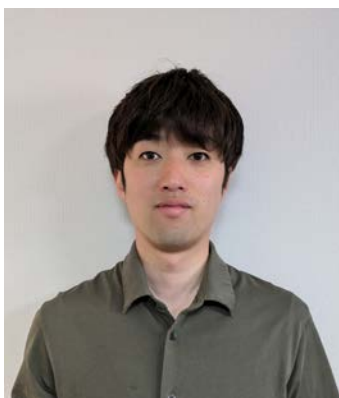
教育や研究、運営において生命理工学院に貢献できますよう頑張りたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

藤 泰子 准教授



2023年4月より、生命理工学院に准教授として着任いたしました藤泰子と申します。研究室を立ち上げるにあたり、多くの先生方や事務の方々に大変お世話になりました。おかげさまで研究環境も整い、学生も配属され、ようやく本格的に研究を始めることができるようになりました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。まだまだ至らない点多々ありますが、今後もより良い研究成果を目指し、成長していきたいと思います。

私の研究は、植物を材料として、生命の根源的な仕組みである「エピジェネティクス」を探索するものです。エピジェネティクスとは、DNA配列の変化を伴わずに遺伝子の働きを制御する仕組みで、その制御の中核は多くの真核生物に保存され、生殖、発生、環境応答など様々なプロセスに関与しています。これまでは、分子遺伝学やゲノミクスを融合させた植物のDNAメチル化に関する基礎研究に従事してまいりました。今後は応用研究の展開にも力を注いでまいります。日本の科学界の更なる発展に貢献できるよう、微力ながら努力してまいります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

阿尻 大雅 助教

2024年3月より、生命理工学院 安井研究室の助教として着任しました。阿尻大雅と申します。東京工業大学の教員として研究・教育に携わる機会をいただき、感謝しております。新たな環境でのスタートに、心身共に引き締まる思いです。

私は2019年に北海道大学 総合化学院で渡慶次学先生のご指導の下、学位を取得しました。その後、検査メーカーであるシスメックス株式会社に就職し、約5年間企業研究者として勤めておりました。専門はマイクロ・ナノ流体力学で、学生時代にはマイクロ・ナノ流体デバイスを用いた新規分析方法の開発、シスメックス在籍時には細胞操作技術の開発などに携わりました。企業で培った経験を強みとし、さまざまなことに挑戦したいと考えております。これまでとは異なる環境で困難に直面するかもしれませんが、その際にはご指導いただければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

大坂 夏木 助教

2023年4月より、科学技術創成研究院化学生命科学研究所 田中・吉田研究室の助教に着任しました大坂夏木と申します。私は2020年に東京農業大学農学研究科で博士(バイオサイエンス)を取得後、慶應義塾大学先端生命科学研究所で研究員として研究をしてきました。この度は本学の教員として採用いただき、研究と教育に関わる機会をいただけましたことを感謝しております。

私は、細胞が環境変化やストレスに応じて代謝と増殖を制御する仕組みに興味を持っており、これまで様々な細胞活動のエネルギー通貨として利用されるグアノシン三リン酸(GTP)の合成制御について、バクテリアの栄養飢餓応答、がん細胞の増殖との関連性について研究を行ってきました。現在、田中・吉田研では、細胞の増殖サイクルにおけるリボソーム生合成と代謝との関係性について、枯草菌や大腸菌、酵母を対象に研究を進めており、各々の研究対象を比較しながら研究を進めることで、生物に普遍的な細胞の代謝と増殖を繋ぐシステムを明らかにしたいと考えております。これから、研究及び教育活動を通じて、本大学の発展に貢献できるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

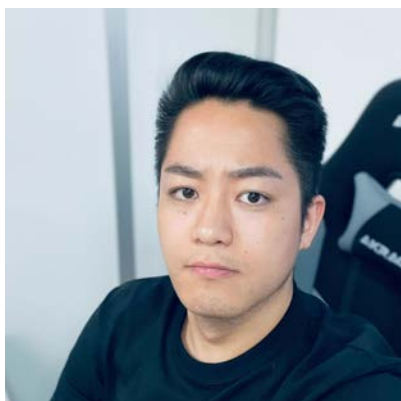
木幡 愛 助教



2023年7月に、生命理工学院 金原研究室の助教に着任いたしました木幡愛と申します。2022年3月に東京大学大学院 工学系研究科 化学生命工学専攻で博士の学位を取得し、その後2023年6月まで、同専攻の特任助教として勤務しておりました。

化学で生命の機能を制御したいという思いのもと、有機化学・超分子化学・フッ素有機化学を武器に核酸やタンパク質の化学修飾を手がけ、ケミカルバイオロジーやバイオマテリアルの分野で研究を展開してまいりました。これからは生命現象を理解するという点にも目を向け、特異な動きや機能を持つ物質を作ることに挑戦したいと考えております。精一杯、研究・教育に邁進していく所存です。ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

近藤 洋平 助教



2023年9月より生命理工学院川井研究室の助教に着任いたしました近藤洋平と申します。私は2022年3月に東京大学工学系研究科にて博士(工学)を取得後、民間企業にて1年半ほど勤務し、アカデミアに戻ってまいりました。この度は本学の教員として採用していただき、研究と教育に携わる機会を与えてくださったことに心より感謝いたします。

私の専門は、ケミカルバイオロジーです。これまでは、核磁気共鳴の感度を劇的に向上する超偏極技術を利用した疾患の早期診断を指向する核磁気共鳴分子プローブの開発に取り組んでまいりました。これからは、検出モダリティに光を加えて、オリジナルな分子設計やアプローチによるケミカルバイオロジー応用を展開できればと考えております。

日々の研究や教育活動を通じて東京工業大学ひいては東京科学大学の発展に貢献できますよう尽力いたします。ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

田中 裕之 助教



2024年2月に、生命理工学院伊藤武彦研究室の助教に着任いたしました田中裕之と申します。助教着任前までは、同研究室で研究員としてバイオインフォマティクス技術を用いて、植物を中心とした、さまざまな真核生物の全ゲ

ノム解析に従事してまいりました。「生命の設計図」であるゲノムからは、その中にコード化された遺伝子の全容など、さまざまな情報を得ることができます。しかし、ゲノムの中に埋め込まれた生命情報は、未だ一部しか明らかにされておりません。今後、植物ゲノム解析を推進し、生物学や農業の発展に貢献していきたいと考えております。

野々山 翔太 助教



2023年11月より生命理工学院 増田研究室の助教に着任いたしました野々山翔太と申します。私は、東北大学大学院生命科学研究科で博士(生命科学)を取得した後、学術研究員として活動し、その後、本学で博士研究員として研究に従事してまいりました。本学の教員として研究および教育に携わる機会をいただけたことに感謝しております。

私の専門は微生物学で、これまでは、細菌が示すさまざまな生命現象の分子メカニズムを解明するべく、研究を行ってきました。特に、人体や土壌、植物など幅広い環境に適応可能な *Burkholderia* 属細菌をモデルとして、病原性細菌としての一面に着目し、細菌の環境適応や病原性の発揮と密接に関わる鉄恒常性維持機構の研究や、発現量変化によって薬剤耐性に関わる潜在的遺伝子を探索し、その

薬剤耐性メカニズムの解明に取り組んできました。今後は、自身の専門である微生物学と増田研究室の植物生理学を組み合わせた研究を進めていく予定です。特に、私がこれまで研究してきた *Burkholderia* 属細菌の植物病原性細菌としての特性に焦点を当て、植物への感染メカニズムを明らかにしていくとともに、植物と細菌間の相互作用メカニズムをより詳細に解明するため、細菌だけでなく植物にも焦点を当てた研究に挑戦したいと考えています。

研究と教育に全力を尽くし、東京工業大学の発展に貢献してまいりますので、ご指導度鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

藤岡 礼任 助教



2023年4月より、生命理工学院 神谷研究室の助教に着任いたしました藤岡礼任と申します。ポスドク等の期間を経ずに学生から直接の着任となり右も左も分からなかったところでありましたが、周囲の先生方や生命事務の皆様のお力添えにより無事にキャリアをスタートさせていただけたこと、この場を借りて深く御礼申し上げます。私はケミカルバイオロジーという化学と生命科学の融合領域における研究を専門としており、生命科学系の多岐にわたる分野の専門家の先生方がいらっしゃる生命理工学院を非常に刺激的な環境と感じています。生

命理工学院の更なる発展の一助を担えるよう、一生懸命邁進していこうと考えておりますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

PROKOFEVA Kseniia 助教



My name is Kseniia Prokofeva, and I have been appointed as an Assistant Professor in Kuroda Laboratory at the School of Life Science and Technology as of October 2023.

I obtained my Ph.D. degree in September 2023 from the University of Tsukuba, where I was studying in Sakurai/Hirano Laboratory at the International Institute for Integrative Sleep Medicine. I am grateful to my supervisors for their guidance and support during my student years.

My research field is behavioral neuroscience. During my Ph.D. study, I was working on deciphering of intrahypothalamic neuronal circuits regulating sleep and wakefulness and identified a novel neuronal circuit that induces wakefulness in mice. In Kuroda Laboratory at the Tokyo Institute of Technology, I am going to focus on elucidation and dissection of neuronal circuits that are crucial for maternal and prosocial behaviors.

I am honored to become a member of the Tokyo Institute of Technology and I will make every effort to contribute to the development of the School of Life Science and Technology in research, education, and strengthening of international relations. I am looking forward to working with you.

六車 共平 助教

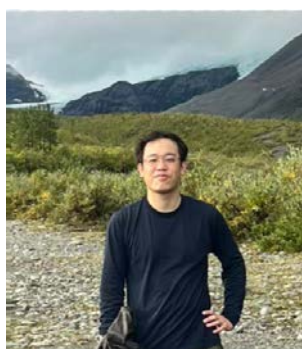


2024年3月に科学技術創成研究院 化学生命科学研究所 西山・三浦研究室の助教に着任しました六車共平と申します。私は、2018年に東京薬科大学で博士(薬学)号を取得しました。その後、日本学術振興会特別研究員(PD)と基礎科学特別研究員の制度を利用し、東京工業大学および理化学研究所で博士研究員として研究を続けてまいりました。このたび東京工業大学の教員として研究・教育に携わる機会をいただきましたことを感謝しております。3月に着任したばかりであるため、まだ不慣れなことが多いのですが、研究や教育の面で少しでも貢献できるよう精進して参りたいと存じます。

研究では、機能や性質が体内で変化する分子に興味があり、ペプチドをツールとして利用した小分子薬物のプロドラッグや抗体薬物複合体の化学合成・機能評価を主に行ってきま

した。今後も様々な機能性構造を設計・合成し、機能評価を行なっていきます。これから西山・三浦研究室では、化学的な知識を基盤として、新しい薬物送達システムを構築していきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

村上 匠 助教



2023年8月付で生命理工学院・本郷研究室の助教に着任しました村上匠と申します。私は2008年に東工大に学部入学し、2017年に博士号を取得しました。その後、国立遺伝学研究所で博士研究員として研究に従事してきました。この度、再び東工大・生命理工学院の一員になれたことを大変うれしく、また光栄に思います。

私は環境微生物を主な研究対象としてきました。あらゆる環境中には無数の微生物が生息していますが、その生態や多様性については未知の部分が多いです。そうした環境微生物の性状を理解するために、私はメタゲノム解析を活用した研究を実施しています。中でも、氷河上に生息する微生物群集を継続的に研究しており、変動する氷河環境が微生物群集の動態に与える影響について今後さらなる調査を進めていきたいと考えております。

最後になりますが、これから研究・教育活動に一層尽力する所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。

異動の先生の挨拶

中戸川 仁 教授



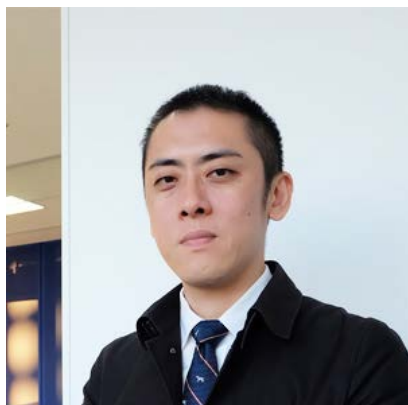
2023年4月1日、科学技術創成研究院 細胞制御工学研究センターの教授に着任しました。生命理工学院には研究科時代を含め2014年6月からの約9年間、准教授として大変お世話になりました。この場をお借りして改めて深く感謝申し上げます。前職では、すずかけ台キャンパスS2棟3階で約3年間、その後B2棟9階に引っ越して6年間を過ごしました。そして異動後の新しい研究室は、S2棟3階...と完全な出戻りになりましたが、引き続き生命理工の学生たちと楽しんで研究させていただいております。今後とも宜しくお願いいたします。

増田 真二 教授



2023年4月に生命理工学院の教授を拝命しました。私は2003年12月に生命理工学研究科高宮・太田研究室(当時)の助手となり、バイオ研究基盤支援総合センターの准教授を経て今に至りますので、もう20年このキャンパスで過ごしたことになります。これまで光合成生物の環境適応に関する研究を一貫して進めてきましたが、手がけたいいくつかのテーマが一定の成果となるまでそれぞれ10年ほどかかりました。ということは、新しく研究をスタートし、完結させられるテーマは、私の年齢から考えるともうあと1つか2つかかもしれません。この移動を機に、新たな研究領域の開拓に着手し、学生と一緒にこれまで以上に研究に邁進したいと思います。今後どうぞよろしくお願い致します。

門之園 哲哉 准教授

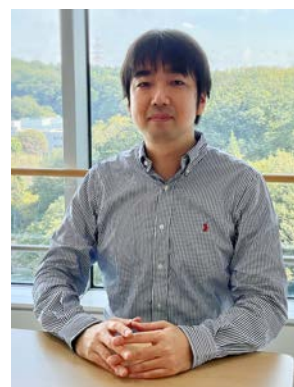


2023年4月に准教授に異動しました門之園哲哉と申します。私は、2010年に助教として東工大(近藤科江研究室)に着任し、2017年からは主指導助教として研究と教育に取り組んできました。

研究においては、がん標的バイオ医薬品を対象とした創薬研究を進めております。特に、タンパク質工学や合成生物学的な研究手法と、計算科学や情報科学的な研究手法を組み合わせ、高性能バイオ医薬品のデザイン技術の開拓とがん診断プローブ開発への応用に取り組んでいます。今後は学内の先生方との連携研究をさらに推進し、東工大だからできる創薬研究を追求していきます。

この度の異動を契機に、生命理工学院の更なる発展に貢献できるよう、努力して参ります。どうぞよろしくお願い致します

正木 慶昭 准教授



2023年9月より、生命理工学院の准教授に着任いたしました正木慶昭と申します。

私たちの研究室は、核酸医薬の新しい可能性を追求すべく、有機化学を中心とした研究を展開しています。核酸を分子としてみると、たった4種類の核酸塩基の並び順が違うだけのポリマーなのに、生物の情報の保存・伝達から触媒活性まで、多様な機能を果たすこと

ができる分子です。この核酸に、タンパク質などの相互作用が組み合わさることで、複雑で重層的な制御ネットワークが形成されています。核酸分子は比較的シンプルな構造であるがゆえに、化学による介入で新しい機能をさらに加えていくことが可能です。例えば、糖部構造の固定化により、核酸-タンパク質相互作用を一部制限することで、本来持っていない選択性を導入することも可能です。核酸-タンパク質相互作用部位であるリン酸基を少しずつらすことで、目的としない相互作用を回避することができます。このような研究は核酸医薬品の安全性向上に貢献できると考えています。

まだ研究環境の立ち上げに苦労している最中ではありますが、少しずつ実験も動かせるようになってきました。ラボのスタッフ、学生さんと共に核酸のおもしろさ、研究の楽しさを追求し、縁の下の力持ちになるような知見を生み出していくことが目標です。今後ともよろしくお願いいたします。

ご栄転の先生の挨拶

安部 聡 助教



2024 年 4 月に京都府立大学大学院生命環境研究科に異動しました。私は、2012 年 5 月に上野研に着任して以来、12 年間生命理工学研究科・生命理工学院にお世話になりました。素晴らしい研究環境のもと、大変充実した日々を過ごすことができました。これもひとえに

先生方や事務室の皆様方のご支援のおかげです。心より感謝いたします。

新天地の京都府立大学では、この 4 月に学部、学科の再編が行われ、私は、生命理工情報学部、生命化学科の准教授として、研究室を主宰させていただくことになりました。公立大学である京都府立大学では、地域に貢献することも重要なミッションのひとつです。国立大学とは違った研究や教育を楽しみながら、新しい学科を盛り上げるべく、東工大で学んだことを活かし、精一杯教育と研究に邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

定年退職・ご栄転された先生方～ありがとうございました

藤井 正明 教授

三原 久和 教授

山本 直之 教授

赤間 啓之 准教授

野々村 恵子 准教授

伊藤 由馬 助教

活動・行事

オープンキャンパス 2023

小倉 俊一郎 准教授

2023 年度の大学・大学院受験生向け学院・大学院入試説明会およびすずかけ台オープンキャンパスが 5 月 14 日(日)にすずかけ台キャンパスにて、高校生・受験生向け全学オープンキャンパスが 8 月 10 日(木)に大岡山キャンパスにて開催されました。新型コロナウイルス感染症も落ち着いたことから、実に 4 年ぶりの対面開催となりました。

5月に開催されたオープンキャンパスはすずかけサイエンスディと同時にやったこともあり、合計で400名近い方が生命に足を運んでいただきました。午前中に大学院受験のための説明会、午後に大学受験のための説明会を開催し、同時に30以上の研究室に研究室公開をしていただきました。当日は天候が今一つであったにもかかわらず、大変多くの意識の高い学生さんや親御様のご来場をいただき、大変盛況に終えることができました。説明にあたった先生方や公開に協力いただいた関係者の皆様に御礼申し上げます。

8月のオープンキャンパスは、高校生・高専生・受験生を対象に開催されました。大変暑い中の対面開催でしたが、目立った混乱もなく盛況に終了しました。全学と各学院に加えてダイバーシティ推進室、学生支援課、留学生交流課、図書館による企画や、工大祭実行委員会など学生からの企画も含まれており、多彩で充実したイベントになっていました。生命理工学院からは、「学院説明会」、「学院個別相談会」、「模擬講義」、「研究室公開」を開催しました。学院説明会では200名を超える参加者に対し、梶原将学院長、伊藤武彦系主任から生命理工学院における研究の魅力や、教育面でのカリキュラムの特徴などについてご紹介があり、また総合型選抜についても説明がありました。個別説明会では6名の教員がface-to-faceで学生さんや親御様の質問に丁寧にお答えしておりました。模擬講義として刑部祐里子教授による「ゲノム編集で遺伝子の機能を変える」、門之園哲哉准教授による「抗体でがんを治療する！！」を開催し、合わせて400名を超える参加者に対して、研究の基礎から最先端までの内容が分かりやすく丁寧に

説明して頂きました。研究室公開では大岡山キャンパスに研究室のある6研究室が公開に応じいただき、合わせて300名の参加者が実際の研究に触れる機会を楽しんでおりました。どの企画も盛況であり、内容が素晴らしかったとアンケートでも大変好評でした。参加学生の様々な質問に対して、それぞれの教員が回答しながら、研究の面白さを伝えて頂くことができました。オープンキャンパスの開催にあたり、全面的な支援を頂いた生命事務をはじめとし関係の先生方に御礼申し上げます。



2023年の全学オープンキャンパスは残念ながら入場者の上限を設けた開催となってしまいました。2024年度はさらなる発展が期待できるものと存じます。2024年度委員長である神谷真子教授を中心に鋭意準備を進めているところでございますので、引き続きのご支援賜りますようお願い申し上げます。

第12回生命理工国際シンポジウム

神谷 真子 教授

野々村 恵子 准教授

近藤 徹 講師

2023年度の生命理工国際シンポジウムが2024年1月24日(水)に開催されました。今回は光をキーワードに生命・化学の諸現象の解明および医療技術などの応用に向けた先端研究について、多岐にわたる観点をお持ちの先生方をお招きし、海外から2名(日本人1名を含む)、国内から5名の方にご講演いただきました。海外の先生方とはオンラインで繋ぐ形になりましたが、すずかけ台キャンパス・すずかけホールにて対面形式で開催することができ、活発な議論が行われました。

マサチューセッツ工科大学の Schlau-Cohen 先生にはシグナル伝達タンパク質の構造ダイナミクスに関する単一分子分光解析についてお話いただきました。マックスプランクフロリダ神経科学研究所の稲垣秀彦先生には神経ネットワーク解析に関する最新のトピックスについて解説いただきました。東北大学の柴田穰先生には極低温顕微鏡を用いた光合成組織の分光イメージングについてお話いただきました。広島大学の奥村美紗子先生には光ストレス環境下で線虫の口の形が変化する光認識機構について興味深いお話を伺うことができました。北海道大学の小川美香子先生には赤外光や X 線を用いる光線治療に向けた光反応機構の解析研究に関してご講演いただきました。学内からは物質理工学院の相良剛光先生にご講演いただき、機械的な外力と光物性が相関するメカノセンシング発光材料について最新の成果をお話いただきました。学院内

からは川井清彦先生にご講演いただき、単一分子観察で見えてくる蛍光の明滅現象を利用した生体分子分析法について解説いただきました。

COVID19の影響を考慮しつつ、オンラインと対面開催の両方を想定して準備を進めてまいりました。状況が収束に向かっていることもあり、今回は対面での開催を実現することができ、170名にのぼる非常に多くの方にご参加いただきました。参加者の内訳としましては、学部学生31%、修士学生24%、博士学生16%、教職員26%、その他3%となっており、数多くの学生に参加いただけた点でも大変盛況だったと考えております。また、今回ならではの取り組みとして、シンポジウム翌日には講演者の先生方のラボツアーも企画いたしました。増田研、田中・吉田研、川井研、門之園研、野々村研、立花研にご協力いただき、生命理工学院の研究室を紹介することができたとともに、異分野間交流の良い機会にもなりました。さらに、講演者の先生方と学生とのランチョン交流会を開催いたしました。研究トピックスに関する議論に加え、通常の学会や研究会ではなかなか聞くことができないキャリアパスや研究活動の裏側についてもお話を伺うことができ、今後の進路を考える学生にとってはこれまでにない刺激となったものと期待しております。

第12回は野々村先生、神谷先生を中心に、他のワーキンググループメンバーがサポートする形で準備を進めました。会場の準備や片付け、当日の会場誘導やマイク係につきましては、野々村研および神谷研の学生さんや藤岡先生など、多くの方々にサポートいただきました。これらに加え、生命事務の方々にも様々な

面でご助力いただいております。この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

次の主査、副査の先生方のもと、第13回もワーキンググループの先生方と協力して盛会となるよう進めてまいります。



12th Tokyo Tech International Symposium on Life Science and Technology
Photon explores new frontiers of biology, chemistry and medical therapy

January 24, 2024, 10:00-15:30
 Tokyo Tech Yokohama Suzukake Hall

Invited Speakers

- ◆ Gabriela S. Schlau-Cohen, MIT
- ◆ Hidehiko Inagaki, Max Planck Florida
- ◆ Yutaka Shibata, Tohoku University
- ◆ Mikako Ogawa, Hokkaido University
- ◆ Misako Okumura, Hiroshima University

Tokyo Tech Speakers

- ◆ Yoshimitsu Sagara, School of Materials and Chemical Technology
- ◆ Kiyohiko Kawai, Professor, School of Life Science and Technology

Coffee & Socializing
 15:30-17:00 @ Suzukake Hall 3F Lounge

東京工業大学
 Contact : <https://forms.gle/Xvd9G1LcVcceLbvj7>
 E-mail : bbis2024@bio.titech.ac.jp
 Address : 4259 Nagatsuta, Midori, Yokohama, Kanagawa, JAPAN

ASEAN-Japan International Research Symposium for Life Science and Technologyを開催

日本とASEAN(東南アジア諸国連合)との交流は1973年に設立された日・ASEAN合成ゴムフォーラムに始まり、2023年は交流開始から50周年にあたります。日ASEAN友好協力50周年にあたる2023年、日本とASEANは、政治、経済・文化・青少年交流、観光など幅広い分野で交流事業を実施するという方針を受けて、その活動の一つとして、東京工業大学 生命理工学院が主体となり、チュラロンコン大学理学部の共催のもと、タイ王国の首都バンコクにある、チュラロンコン大学で”ASEAN-Japan

International Research Symposium for Life Science and Technology”を2023年11月16-17日の2日間にわたり開催いたしました。行政から日本アセアンセンター・在タイ日本国大使館・日本学術振興会 バンコク研究連絡センター、また民間からは味の素グループ・伊藤忠ケミカルフロンティア・東レ・竹田理化工業・堀場製作所の協賛を受け、産学官一体となるシンポジウムを開催することができました。参加者の出身国はインドネシア共和国・マレーシア・フィリピン共和国・タイ王国・ベトナム社会主義共和国とASEAN10か国のうち、特に生命理工学院との関係の深い5か国の研究者・学生・企業人に加え、日本から行政官・企業人・研究者・学生の参加があり、出席者60名と盛大なシンポジウムを開催することができました。

受賞

2023年度HFSPグラント

松浦 友亮 教授

藤島 皓介 准教授

HFSPはフランスのストラスブールに本部を置く国際ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム機構(HFSPPO)が実施する国際研究支援プログラムです。ライフサイエンスに特化した最先端の学際的研究において、大陸間の研究者による分野横断的な研究連携を促進することを目的として設立されました。2023年の募集では、合計596通のプロポーザルから9件の若手研究グラントと25件のプログラムグラントが採択されました。

松浦先生は Dieter Braun 博士(LUM Munich)、Kerstin Göpflich 博士(U Heidelberg)とともに ‘Autonomous evolution of synthetic

cells under non-equilibrium conditions’という題目で受賞しました。

また藤島先生は Stephen Freeland 博士 (University of Maryland), Stephen Fried 博士 (Johns Hopkins University), Klara Hlouchova 博士 (Charles University) とともに ‘Exploration of the structure-function space of prebiotic to biological proteins’ という題目で受賞されました。



2023年度「東工大挑戦的研究賞」

岡田 智 准教授

金森 功史 助教

挑戦的研究賞は、東工大の若手教員の挑戦的研究の奨励を目的として、世界最先端の研究推進、未踏の分野の開拓、萌芽的研究の革新的展開または解決が困難とされている重要課題の追求等に果敢に挑戦している独創性豊かな新進気鋭の研究者を表彰します。受賞者には、支援研究費を贈ります。40歳未満の准教授、講師又は助教が対象です。これまで本賞を受賞した研究者からは、多くの文部科学大臣表彰の受賞者が生まれています。

挑戦的研究賞受賞者のうち特別に優れている研究者には「末松特別賞」を贈っています。末松特別賞は、元学長の末松安晴栄誉教授による若手研究者支援への思いを継承し設けられた「末松基金」による顕彰です。

岡田 智 准教授 末松特別賞

研究課題名：全脳分子神経イメージングに資する磁性プローブの開発

金森 功史 助教

研究課題名：ゲノム光酸化法の開発と酸化損傷塩基によるエピジェネティクスの理解



2023 年度島津奨励賞

神谷 真子 教授

島津奨励賞は、日本の科学技術振興のため、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ、かつその研究の発展が期待される国内の研究機関に所属する 45 歳以下の研究者に対して贈られる賞です。2023 年度は神谷真子教授が「革新的バイオイメージングを実現する高精度化学プローブの開発」の研究で受賞しました。



2023 年版クラリベイト社の高被引用論文著者に選出

刑部 祐里子 教授

刑部祐里子教授(生命理工学コース 担当)が、クラリベイト社の高被引用論文著者リスト 2023 年版(Highly Cited Researchers 2023)に選出されました。クラリベイト社が 11 月 15 日に発表しました。



HPCI 利用研究課題 優秀成果賞

TRAN Phuoc Duy 助教

スーパーコンピュータ「富岳」を中核とする革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ(HPCI)は、国内の大学や研究機関の計算機システムやストレージを高速ネットワークで結んだ共用計算環境基盤です。優秀成果賞は 2022 年度に実施・完了した一般課題、若手課題および産業課題の中から、成果報告会プログラム委員会に選ばれた特に優秀な成果が認められた課題に与えられるものです。今回は様々な分野の中から 8 課題が受賞し、TRAN 助教の“How viral protein interfere the interactions of p53 protein with DNA”(hp220107、「富岳」若手課題)はバイオ・ライフ分野および東京工業大学から選ばれた唯一の受賞課題となりました。



令和 5 年度竹田国際貢献賞

藤島 皓介 教授

生命理工学分野の国際貢献の奨励を目的として、竹田理化工業株式会社様のご支援により平成 14 年に国際貢献賞が創設されました。が創設されました。令和 5 年度は地球生命研究所の藤島皓介准教授が「日本-チェコ-アメリカ間国際共同研究で迫る原始タンパク質の機能と構造」で受賞しました。

令和 5 年度竹田若手研究者賞

安井 隆雄 教授

城所 聡 助教

生命理工学分野の若手研究者の研究の奨励を目的として、竹田理化工業株式会社様のご支援により平成 14 年に若手研究者賞が創設されました。令和 5 年度は、安井隆雄教授が「ナノワイヤを用いた細胞外小胞研究のフロンティア開拓とリキッドバイオプシーへの展開」で、城所聡助教が「高等植物の低温ストレス初期応答における転写制御メカニズムの解明」で受賞されました。



令和5年度 手島精一記念研究賞 研究論文賞

手島精一記念研究賞は、東京工業大学の前身である東京工業学校及び東京高等工業学校の校長として25年有余にわたり工業教育に努め、日本の工業教育の進展のために多大な貢献を果たした手島精一校長が1917年に退官した際、その功績を称えるため、当時の政界、財界、教育界の諸名士が発起人となって募金が行われ、設けられたものです。創設以来、本学関係者及び本学大学院学生の研究を奨励し、多くの優れた業績の栄誉を称えています。

令和5年度の研究論文賞として、*Small*誌に掲載された"Efficient Microfluidic Screening Method Using a Fluorescent Immunosensor for Recombinant Protein Secretions"が選ばれました。著者は以下の方々です。

伊藤 良浩さん(生命理工学院 生命理工学系博士後期課程修了、味の素株式会社 バイオ・ファイン研究所 主任研究員、佐々木隆一 味の素株式会社 アミノサイエンス事業本部 マネージャー)
朝里さやか(味の素株式会社 バイオ・ファイン研究所 上席研究員)

安田 貴信 助教(科学技術創成研究院 化学生命科学研究所)

上田 宏 教授(科学技術創成研究院 化学生命科学研究所)

北口 哲也 准教授(科学技術創成研究院 化学生命科学研究所)

学生の活動

大隅ジャーナル賞を大学院生が受賞

2016年ノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典栄誉教授からの多額の寄附を原資として「大隅良典記念基金」が設置されています。本基金は、将来の日本を支える優秀な人材の育成、および長期的な視点が必要な基礎研究分野における若手研究者等の育成の推進など、研究分野の裾野の拡大を目的としています。

大隅ジャーナル賞は、大隅良典記念基金を原資として、優秀な論文が掲載された生命理工学系の学生を表彰し、学資一時金を支給するもので、2017年4月に顕彰を開始しました。

2023年度は6名の学生が受賞しています。
第22回(2023/7/26)

ZHANG Wancheng さん

(博士課程3年生 丸山研究室)

“2D-3D-Convertible, pH-Responsive Lipid Nanosheets”

Small



西村 開さん

(博士課程2年生 中村・岡田研究室)

“Efficient neutron capture therapy of glioblastoma with pteroyl-closo-dodecaborate-conjugated 4-(p-iodophenyl)butyric acid (PBC-IP)”

Journal of Controlled Release



第23回(2023/9/21)

大内 俊さん

(博士課程3年生 伊藤研究室)

“GreenHill: a de novo chromosome-level scaffolding and phasing tool using Hi-C”

Genome Biology



HU Mingxin さん

(博士課程3年生 小畠・三重研究室)

“Polysarcosine-Coated liposomes attenuating immune response induction and prolonging blood circulation”

Journal of Colloid and Interface Science



第24回(2023/11/1)

高橋 一樹さん

(博士課程3年生 本郷研究室)

“Emergence of putative energy parasites within Clostridia revealed by genome analysis of a novel endosymbiotic clade”

The ISME Journal



第25回(2024/2/28)

津田 正仁 さん

(博士後期課程3年生 中村・岡田研究室)

“Methylene Insertion into Nitrogen-Heteroatom Single Bonds of 1,2-Azoles via a Zinc Carbenoid: An Alternative Tool for Skeletal Editing”

Advanced Science



GUO Haochen さん

(博士課程2023.09修了 西山・三浦研究室)

“Investigation of labile iron-modulation in tumor microenvironment using polymeric iron chelators and its utility for cancer therapies”



博士後期課程修了生が2023年度コ ラファス賞を受賞

1982年スイスの科学者、Dimitris N. Chorafas氏によって設立された賞で、バイオテクノロジーを含む科学の様々な分野の研究を対象とし、若い研究者への援助を目的として、毎年世界各国の優秀な学生等に贈られるものです。

2023年度は2名の修了生が受賞しました。

上船 史弥 さん

(博士課程2022.9修了 桑・白木研究室)

“The regulation of mouse beta-cell function mediated by dopamine D1-D2 heteromer”



令和5年度 手島精一記念研究賞 留学生研究賞

留学生研究賞として生命理工学院の博士後期課程修了生2名が選ばれました。

LESTARI Beniさん(生命理工学院 生命理工学系博士後期課程修了、インドネシア・ガジャ・マダ大学 医学部 薬理学・看護学科 博士研究員)

"Placental Mammals Acquired Functional Sequences in NRK for Regulating Cell Proliferation and Apoptosis in Placenta"

WANG Junさん(生命理工学院 生命理工学系博士後期課程修了)

"Cationic copolymer for augmentation of dynamic DNA circuits"

学会発表での受賞

丸山 智也 さん

(博士後期課程 2 年 瀧ノ上研究室)

The 29th International Conference on DNA Computing and Molecular Programming (DNA29)

Best student/postdoc poster award

Controlled division of DNA droplet-based artificial cells coupled with enzymatic time delay circuit



今本 南さん

(博士後期課程 2 年 二階堂研究室)

日本進化学会第 25 回大会

学生口頭発表賞 最優秀賞

The genomic basis for trophic adaptation of East African egg-eating cichlids



奥 悠莉 さん

(修士課程 1 年 松田研究室)

第 23 回生体触媒化学シンポジウム

The excellent poster presentation award 3rd place & ChemBioChem Best Poster Award

Thermoplasma acidophilum 由来リンゴ酸脱水素酵素を用いる CO₂ 固定化反応の開発

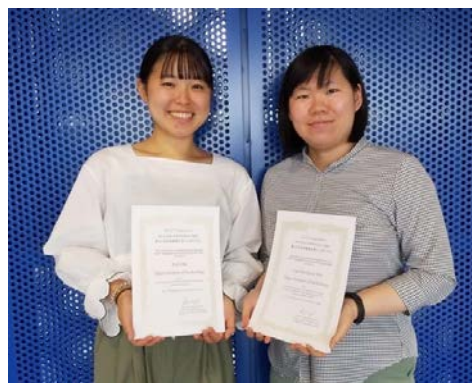
LE Lan Huong Viet さん

(博士後期課程 松田研究室)

第 23 回生体触媒化学シンポジウム

The excellent poster presentation award 2nd place & ChemBioChem Best Poster Award

Enzymatic Approaches for Enantioselective Lactone Synthesis by Baeyer-Villiger Monooxygenases from *Fusarium* sp. NBRC 109816



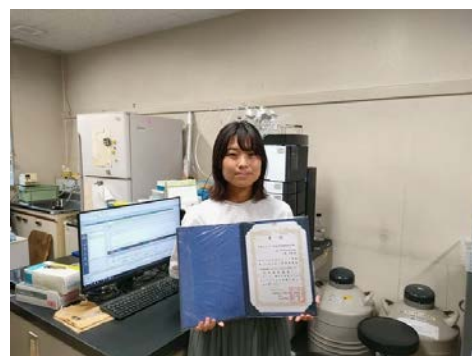
小澤 美織 さん

(修士課程 2 年 一瀬研究室)

日本ビタミン学会第 75 回大会

学生優秀発表賞

免疫細胞における GCH1/BH4 の合成調節機構



小川 涼平 さん

(修士課程2年 一瀬研究室)

第25回活性アミンに関するワークショップ
優秀発表賞

ドーパミンニューロン選択的テトラヒドロピオブ
テリン欠乏マウスを用いたドーパミン欠乏による
運動障害の解析



受賞した小川涼平さん(写真左)

菊池 幸祐 さん

(博士後期課程3年 上野研究室)

日本化学会第103春季年会 (2023)

学生講演賞

タンパク質複合化セルロースナノ結晶による構
造色フィルムの創出

小島 摩利子 さん

(博士後期課程3年 上野研究室)

日本化学会第103春季年会 (2023)

学生講演賞

細胞内タンパク質結晶エンジニアリングによる
天然変性タンパク質の構造決定

PHAM Thuc Toan さん

(修士課程2年 上野研究室)

日本化学会第103春季年会 (2023)

学生講演賞

細胞内タンパク質結晶へのタンパク質ケージ
の蓄積

(Accumulation of Protein Cage into in-cell
Protein Crystal)



受賞した PHAM さん(左)、小島さん(中)、菊池さん(右)

ONGGONO Suwandi さん

(修士課程2年 門之園研究室)

第55回 若手ペプチド夏の勉強会
口頭発表優秀発表賞

親和性最適化による抗原過剰発現細胞に特
異的な直列三量体ナノボディの創出

山川 萌恵 さん

(修士課程1年 門之園研究室)

第55回 若手ペプチド夏の勉強会
口頭発表優秀発表賞

ナノ膜小胞MNVによる膜タンパク質標的抗体
の親和性評価法の構築

上條 航生 さん

(学士課程4年 門之園研究室)

第55回 若手ペプチド夏の勉強会
ポスター発表優秀発表賞

休眠がん細胞を検出するためのバイオマー
カーの探索



受賞した上條さん(左)、山川さん(中)、Onggonoさん(右)

須之内 愛さん

(修士課程2年 和地研究室)

第75回 日本生物工学会大会

学生最優秀発表賞

コリネ型細菌のミコール酸生合成欠損変異株
の性状解析



ONGGONO Suwandiさん

(修士課程2年 門之園研究室)

第75回 日本生物工学会大会

学生優秀発表賞

親和性最適化による標的細胞特異的な直列
三量体ナノボディの創出



その他の受賞

東工大学生リーダーシップ賞

長谷川 義人さん

(学士課程4年)

東京工業大学では、学生の国際的リーダーシップの育成を目的として、知力・創造力・人間力・活力などのリーダーシップの素養に溢れる学士課程の2年目から4年目の学生を表彰しています。生命理工学院からは、長谷川義人さんが学勢調査学生スタッフの代表として「学勢調査2022 提言書」を取りまとめたこと、特に東京医科歯科大学との統合や学士課程入試の女子枠導入という大きな変革の中で、調査の設問作成やデータ集計・分析において、また、提言の作成や追加調査を行うにあたって、目標達成意識と個々のメンバーの意見尊重の両立、公平性に配慮しつつ、リーダーシップを発揮してスタッフの作業を取りまとめたことが評価され受賞しました。



授与式後の記念撮影(前列左から2人目が長谷川さん)



今回表彰された学生6名(右から2人目が長谷川さん)

東工大で開催された BIOMOD 2023 で 東工大チームが銅賞受賞

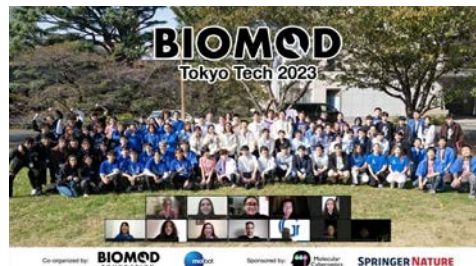
11月4～5日、東京工業大学大岡山キャンパスにおいて、国際生体分子デザインコンペティション「BIOMOD2023」ジャンボリーが開催され、東工大チーム(Team Tokyo Tech)が銅賞を受賞しました。

BIOMOD(International Biomolecular Design Competition)は、「国際分子ロボコン」とも称される、分子ロボティクス・分子プログラミング分野における大学対抗の国際大会です。学部生で構成するチームが、DNA や RNA、脂質やタンパク質といった生体分子を駆使して、独自の分子デバイスや分子ロボットなどをデザイン・作製します。最終的に、一夏かけて研究した成果を Web ページ、YouTube ビデオ、そしてジャンボリーでの学会形式で発表して得点を競います。

BIOMOD は、2011年に米国のハーバード大学主催で始まり、その後、カリフォルニア大学サンフランシスコ校で開催されてきました。本大会は、コロナ禍による中断を経て 2023 年の国際大会の再開に至り、東工大が米国外としては初の開催地に選ばれました。本分野における東工大の先駆的な研究・教育活動が高く評価された結果であり、ロボコン発祥の地である東工大にとって記念すべき重要なマイルストーンといえます。

世界 8 カ国から 16 チームがエントリーした本大会は、14 チームが見事完走し、本学開催のジャンボリーで最終発表を行いました。人工細胞や DNA モーターなどからなる「マイクロインベーダーゲーム」を考案した東工大チーム(Team Tokyo Tech)は、学士課程 1 年生だけで構成されたチームでありながらも、堂々と発

表・質疑応答を行い、メンバーの努力とチームワークの成果を発揮しました。



Team Tokyo Tech メンバー

生命理工学院 学士課程 1 年

伊島 豪志さん

小玉 風介さん

新海 龍成さん

中村 友海さん

阪野 文柊さん

松崎 翔さん

村松 理緒さん

東工大マイスターが「鳥人間コンテスト 2023」で 4 位に

東工大のものづくりサークル「マイスター(Meister)」が、「第 45 回鳥人間コンテスト 2023」の飛行距離を競う「人力プロペラ機部門」に出場し、飛行距離 3,851.83 m で 13 チーム中 4 位の成績を収めました。

出場メンバー(生命理工学院所属者のみ)

安藤一生さん(学士課程 3 年)翼班主任

石田愛翔さん(学士課程 4 年)プロペラ班主任

川見昴瑠さん(学士課程 4 年)プロペラ班パイロット



東工大大学院生らのチームがヨットの「第11回大学対抗&U25 マッチ」で3位入賞

東京工業大学ヨット部 OB・OG の大学院生らで構成されるチーム GRADs(グラッズ)が、2月24～26日に三河みとマリーナ(愛知県豊川市)で開催された「セイル・オン第11回 JYMA 選抜 大学対抗 & U25 ヨットマッチレース 兼 2023 全日本ユースマッチレース選手権大会」に出場し、3位に入賞しました。

この大会には、GRADsをはじめとした大学ヨット部 OB・OG チームや未来の五輪選手を育てる HOPE 育成プログラムに参加する学生などの11チームが参加し、強風が吹く中3日間にわたってレースが行われました。GRADs は予選を全勝で通過し、東工大チーム初となる3位入賞を果たしました。

GRADs メンバー(生命理工学院所属学生のみ)

八鍬 佑樹さん 生命理工学系 修士課程1年
横山 友基さん 生命理工学系 修士課程2年

留学生より

VIBRIANI Agnia



Coming to Japan to pursue graduate studies has never been a mistake. The science environment in Japan is very well established. I never thought I would find a scientific graph showing the changing of taste in every bite of ice cream on its package. When it comes to education, Japan offers plenty of opportunities to excel our scientific knowledge and become a competent researcher. Humbly, I am very grateful to Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology of Japan for awarding me a scholarship to study in Japan since I was in master degree.

Currently, I am in my third year of doctoral degree under the supervision of Prof. Kanami Orihara and Prof. Susumu Kajiwara. Our laboratory has diverse research interest, including circadian rhythm, inflammatory diseases, food allergy, host-pathogen interaction, antimicrobial resistance mechanism, and development of microbial fuel cells. Upon joining this lab, I developed an interest in the circadian rhythm research project. The circadian rhythm is an internal 24-hr rhythm that tells our body when to do things, such as sleep and wake cycle. Keeping our body in sync with the natural 24-hour day is important in maintaining a good health. For example, the skin shows a maximum repair mechanism at nighttime, when environmental stress levels (UV light) are minimized. Dysregulation of the circadian rhythm happens when the internal time is misaligned with the day-night cycle. Prolonged circadian disruption contributes to poor health outcomes. In my research, I am studying the

circadian rhythm regulation in blue light induced skin photoaging. Particularly, I am looking at the skin barrier performance, an important function of the skin as an interface between the body and the environment. There is growing concern regarding the long-term effects of blue light exposure on the skin. Especially during the COVID19 lockdown where everyone is staying at home and spending more time with electronic devices. Therefore, through my research, I aim to understand how the skin's circadian clock responds to the environmental stimulus which can help the skin stay healthy and young.

Living alone in Japan can be challenging, but luckily, Tokyo Tech has a lot of programs for international student to make the adaptation easier. To learn more about Japan, I have taken Japanese classes and joined a cultural activity such as homestay and Japanese festivals. In addition, Kajiwara-Orihara laboratory also has a diverse lab member which helps me less lonely as a foreigner. I am also grateful for the support and encouragement provided by my supervisors in my career development. Thanks to their guidance, I have had the opportunity to present my research at conferences and joined a workshop at national institute. At the moment, I am enjoying my student life here in Japan so much that I can say that Japan feels like my second home. After my graduation, I wish to continue my career as a researcher and contribute to knowledge exchange between Japan and Indonesia.

編集後記

アフターコロナでの体制にも慣れてきた 2023 年度でしたが、多くの新しい先生をお迎えすることができました。生命現象を軸として多種多様な研究者が集まる生命理工学院に更に広がりができたことを嬉しく思います。

新大学の名称が東京科学大学となることが正式に決まり、ライフエンジニアリングコースが人間医療科学技術コースとなることとなり、変革の波が徐々に押し寄せていることを感じつつも日常の忙しさに妙な安心感を覚えながら過ごしてまいりました。Science Tokyo スタート目前ですが、新しい先生方を含めた生命理工学院全体で教員同士がコミュニケーションを深め、お互いを理解していくことで、協力しやすい環境を作り出していけるのではないかと思います。

今年度も本ニュースレターにご寄稿いただいた方々に深く感謝申し上げます。皆様のご活躍や学院の活動を本号で紹介できることを光栄に思っております。今後もニュースレターでは生命理工学院の活動をお伝えして行くこととなると思います。皆様におかれましては引き続きご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

ニュースレター編集委員会主査

折原 芳波

令和5年9月吉日